

「里の秋」

あ つじ てつ じ
阿辻 哲次 京都大学教授

強烈な暑さが続いた夏には、もう秋や冬などこないのではないか、とまで考えたものだが、自然の摂理はまことに偉大で、今年もちゃんと秋がやってきた。

秋にはしめやかな語らいがよく似合う。大勢でにぎやかに楽しむ春の花見とは違って、紅葉は好きな人と二人だけで、過ぎた時間を惜しみながらゆっくりと味わいたいものだ。

万物が活動の休息期に向かう秋は、時間の流れまでどこことなくもの悲しい。そんなときに、車のラジオから名曲「里の秋」が流れてきたりすると、ついしんみりしてしまう。

「里」は《田》と《土》を組み合わせた漢字で、《田》は言うまでもなく田畑を表すが、もうひとつの《土》は「つち」ではなく、土地と農業の神を祭った祠（ほこ）を意味する《社》の省略形なのである。

つまり「里」とは、田畑での豊作を祈願するために神をお祭りしてある場所という意味で、そこが村落の中心だった。

農村にはかつて、神を祭ったおやしりと鎮守の森があった。しかし、昨今では農村が激しく変貌（へんまう）し、田畑をつぶしたあとに、けばけばしいパチンコ屋やカラオケハウスなどが続々と建てられている。豊作を請け負ってきた里の神様も、近頃（ちかごろ）ではギャンブルと歌の上達を保証しなければならなくなったようだ。平和は嬉しいことだが、あの静けさはいったいどこへいつてしまったのだろうか。